

# 日本社会心理学会会報

197号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2013年3月26日

## 第57回シンポジウム 「モチベーションはポジティブな人生を築く」 へのお誘い

第57回公開シンポジウム準備委員会 角山 剛

教育現場、企業組織、スポーツ、あるいは人生のさまざまな場面でモチベーション motivation が語られるようになっていきます。

組織心理学者の C.C.Pinder はワーク・モチベーションを「個人の内部および外部にその源をもつ一連の活力の集合体であり、仕事に関連する行動を始動し、その様態や方向性、強度、持続性を決定づけるもの」と定義していますが、この中の「仕事」を広く「課題」ととらえれば、包括的なモチベーションの定義となります。心理学ではさまざまな領域にわたっての重要な研究対象であり、多くの理論や実践的な知見が蓄積されてきています。

社会心理学領域でも、モチベーションに関連する研究はさまざまな広がりを見せています。近年の大きな潮流であるポジティブ心理学も、人がもつ優れた側面に積極的に着目し、幸福であることを目指してよりよく生きること well-being を探る、そして人生で前に進む力を高めるといふ点では、モチベーション研究にも深く関わるものといえます。

本シンポジウムでは、最近のモチベーション研究がどのように広がり、どのような面からどのように研究が進められているかを、社会心理学の視点から展望し、ポジティブで豊かな人生を築く上でモチベーションがもつ役割を考えていきたいと思います。

3名の研究者からは、本シンポジウムのテーマに沿って、ご自身の研究に基づく興味深い話題をご提供いただき、堀毛一也先生に全体を俯瞰してコメントをいただく予定です。

会場校である東京未来大学は、2007年開学のまだ若く小規模な大学ですが、心理学の専任教員も多く、今回は2つの学部（こども心理学部・モチベーション行動科学部）から7名の本学会会員が準備委員となり、この企画を立てました。キャンパスは、芭蕉「奥の細道」の起点となった宿場町である北千住に近く、また少し足を伸ばせば江戸時代の風情を残す「堀切菖蒲園」もあります。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

(かくやまたかし)

### 《プログラム》

開催日時：2013年5月25日（土）午後1時30分—4時30分

会場：東京未来大学（東武伊勢崎線「堀切」下車徒歩3分）

### 話題提供：

- 竹橋洋毅氏（東京未来大学）  
「目標にどのように向き合うべきか？：目標設定によるモチベーションの向上効果」
- 戸梶亜紀彦氏（東洋大学）  
「感動体験を応用したワーク・モチベーションの効果的向上について」
- 相川 充氏（東京学芸大学）  
「人間関係をモチベートする？感謝スキル？！」

指定討論：堀毛一也氏（東洋大学）

司 会：角山 剛（東京未来大学）

### 《話題提供者より一言》

◎竹橋洋毅氏より

目標の内容は同じでも、それを捉える心の枠組み（フレーム）が異なると、モチベーションや行動方略にも違いが生じることが明らかにされています（例えば、"gain vs. loss", "why vs. how"）。今回は、こうした研究知見を踏まえつつ、課題や状況に応じた目標設定とモチベーション向上効果について話題提供を考えています。

◎戸梶亜紀彦氏より

心理学では、職場という文脈におけるモチベーション研究は、学校における学習の

モチベーション研究に比して遙かに少ないのが現状です。両者には共通する側面もありますが、対象者の発達段階の違い、および職場ならではの制約や特殊性もあるため、異なった観点からの研究も必要とされ

### ● 今号の主な内容

- 【1面】第57回公開シンポジウム
- 【2面】選挙結果
- 【2面】東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか（その4）
- 【3面】若手会員、声をあげる
- 【4面】社会心理学を支えていただいている方々
- 【5面】新入会者名簿など

ます。また、学習場面でのアプローチの仕方は、多くの場合、モチベーションが低下する、あるいは高まらない原因に着目し、その要因を見出して改善するという考え方で行われています。今回のシンポジウムでは、ワーク・モチベーションを高めた体験について検討し、同様の体験を導入することにより、モチベーションのアップを実践的に行うための研究を報告したいと思いません。特に、モチベーションを高める効果があると考えられる感動のメカニズムに着目し、偶発的な体験としてではなく、一定の

仕掛けを設けることでより効果的な体験にする試みについて考えたいと思います。

◎相川充氏より

人生の幸福は、何によってもたらされるでしょうか？お金ではないことはデータでも実証済みです。そうです、人との関係です。親子関係、友人関係、恋愛関係、職場の人間関係など、さまざまな関係がありますが、人間関係が良好ならば、人生の幸福に近づけます。

でも人間関係はストレスの原因にもなり

ます。わずらわしかったりうっとうしかったり。非難されたり、いじめられたり。

結局、人間関係は両刃の剣です。この剣(つるぎ)を上手に使いこなすには、さまざまなコツやスキルが要ります。それらの中で有力なのが“感謝すること”だと言われています。感謝すると、人間関係がモチベートされて、幸せになれるというのです。

でも本当でしょうか？本当だとしたら、どうしてでしょうか？

## 第27期会長に村田光二氏が選出される

第27期役員選挙の結果、村田光二氏(一橋大学)が新しい会長に選出されました。

第27期役員全員の氏名については、確定し次第メールニュースでお知らせし、選挙結果の詳細については会報の次号に掲載します。

## 東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか

(その7)

### ある社会心理学者の関わり

松井 豊

東日本大震災はあまりに多くの被災者・犠牲者の方々を生み、いまなお、その影響を社会に深く残しています。本稿では、同震災に社会心理学者がどう関わったかという事例を紹介させていただきます。

20年前に書いたピンクの本(恋ごろの科学)のせいか、若い研究者の中には、私を恋愛研究者と思われる方が多いようです。もっとひどいことに、「松井豊ってまだ生きてる人だったんですね」と言われたこともありました。

言い訳ではないのですが、私は恋愛研究以外にも、惨事ストレスの研究や実践もしてきました。惨事ストレス(Critical Incident Stress)とは「(災害救援者が)悲惨な事故や災害現場などで活動したり目撃した時やその後生じる外傷性ストレス反応」と定義されます。消防職員や自衛隊員などの災害救援者に限定するのが狭義の定義で、カウンセラーやジャーナリストなど災害救援者以外の人も含める場合は、広義の定義になります。私は、これまで総務省消防庁や東京消防庁などの依頼で、惨事ストレスに関する調査や危機介入を行ってきました。東日本大震災発災時には、大手町にある東京消防庁本庁舎で、ニュージーランドに派遣された職員に対してどのようなケアを行うかという相談をしていました。

私が震災によるストレスの問題に取り組むきっかけの一つは、発災直後から岩手県災害対策本部で医務班を指揮していた秋富慎司先生(岩手医科大学)からのメール(3月14日14:16発)でした。災害対策本部にいる県庁職員、自衛隊員などに、ストレスケアの文書を提供したいので、送って欲しいという内容でした。A4判表裏で印刷できる簡単なパンフレットを作り、メールでお送りしました。様々な方向けのパンフレットを作成し公開してきました。これらのパンフレット類は、報道人ストレス研究会のホームページ(<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~ymatsui/index.html>)に載っていますので、今でもご覧頂けます。

その後、情報提供活動として、日本心理学会の震災対応のホームページ立ち上げの手伝い、消防職員を対象にした携帯版のストレスセルフチェックシステムの公開などに携わりました。

研究活動としては、全国消防職員協議会の依頼による2011年6月に全国から派遣された消防職員の調査、8月に宮城・岩手の沿岸部病院の看護職員の調査、9月と2012年3月に南関東居住者の調査、2012年2月に被災地地元新聞社の記者調査、7月に被災地企業従業員調査、同月に宮城県3自治体の公務員調査を行いました。

支援・実践活動としては、被災した2組織の消防職員への1年間の継続的ケア活動を行い、被災地病院に衣類を贈るボランティア活動を支援しました。現在は、被災地看護職員や被災企業職員へのストレスケア研修を行っています。企業継続計画(BCP)に惨事ストレス対策を取り入れて欲しいという啓発活動も展開中です。

これらの活動を通して感じたことをいくつかあげてみます。

津波の被災地ではおびただしい方が死別を体験し、生活上の不便が続きました。少し落ち着いてからは、将来の暮らしへの不安のしかかるといふ推移が見られました。被災状況による被災者間のギャップや、怒りの潜在的な広がりも見られました。原発事故に見舞われた被災地では、被爆の不安、放射性物質飛散への不安が見られます。被災地居住者や避難者に対する風評被害への懸念は、いまでも感じられます。

全体的な印象として、本震災では、一般的な災害に比べストレス反応の推移が遅いという印象を受けています。とくに原発事故に関連した地域では、心理的問題という視点で見ると、震災が継続中です。死別による悲嘆、生きる目標を失ったうつ、自責や無力感を伴う惨事ストレス、被災者や避難者に覆い被さる差別など、さまざまな社会心理的な問題が起きています。

どうぞ、社会心理学会のみなさまが自分でできる被災者支援を継続して下さいますように願っております。私も支援と研究を進めていきたいと思っております。「生きていた」事のありがたさを噛みしめながら。

(まついゆたか・筑波大学)

## 若手会員、声をあげる

### 『感動』研究へのいざない

加藤樹里

あなたは最近、「感動」していますか？  
こう問われると、感動すればするほど良い、という（近年よく見るような）自己啓発らしきニュアンスが感じられてしまうかもしれない。では、感動は頻繁にするほど良いものなのだろうか？

私が今までに得た知見からは、むしろ感動は、稀に起こるからこそ意味があることが示唆される。感動とは、「自分の限界を感じた」上での、「自分にとっての価値の再確認」といえるためである。

感動を研究している、と自己紹介するとしばしば、そもそも感動って何なの？と問われる。この答えは非常に難しい。感動している本人が感動と思えばそれが感動であるともいえるが、そこに付随する身体感覚も、その対象も様々である。とりあえず辞書の定義を借りれば、感動とは「深く物に感じて心を動かすこと」である。では感動とは、どのような条件で生じるのだろうか。

私は感動の規定要因として「有限」と「価値」という要因に着目し、実験を行ってきた。それらの結果からは、我々は自分の様々な側面に限界を抱え、それを時折再認識するという、そしてそのような有限を意識するからこそ、自分にとって「価値」あるものに対し感動するということを示唆された。死別を通して描かれる家族愛、ちっぽけな自分の存在とは対照的に偉大である自然、苦節があるからこそ沁み渡る達成、といった感動体験には、そんな構造が見出せるのである。

自分は有限な存在であるが、その一生のなかでも大事にしている価値がある。感動

はそんな価値との出会いであり、ときに再会なのである。このような貴重な体験は、毎日ではなく時折起こるからこそ、意味がある。

ところで、我々が感動しているときには、どんな生理的反応が起こっているのだろうか？そもそもなぜ、我々は感動するのか？これらの疑問に直接解答を与える実証研究はほとんどなく、感動に関しては不明な部分が多い。その一因として、海外に（少なくとも英語圏に）感動と等しい名詞概念がないために、感動は直接の研究対象となりにくかったということがあるだろう。しかし、もちろん英語圏の人々が感動しないわけではない。感動に近い概念としては、かつてマズローが至高体験（peak experience）に言及している。また、畏敬感情（awe）に関しても、近年徐々に研究が増えている。ただしそれらは感動の一形態ではあるが、感動と完全に代替可能な概念ではないと考えられる。そういった事情もあり、感動の謎を解く試みはまだ始まったばかりなのである。

私は、感動を実証的に検討する第一歩を何とか踏み出したと考えているが、未知の部分は山積している。しかしその分感動は、多くの可能性を秘めている魅力的なテーマであると思う。今回は貴重な機会をいただき知見のごく一部を紹介したが、本稿を通して皆さまが感動に少しでも興味を持ってくだされば、こんなに嬉しいことはない。そして皆さまの毎日に、「時々」素敵な感動がありますように。

(かとうじゅり・一橋大学)

### 視覚的注意の文化差：共同研究のススメ

小宮あすか

「 $\forall(*\nabla^*)$ ノキヤッキウフしてたら、上田さんとの研究が論文になりました。日本的な注意の散らばりを人工的に作り出した論文です。どぞどぞ。」・・・我ながらふざけたツイートが twitter 上に出回ったのは11月中旬でした。が、論文自体は（もちろん）まじめなものですし、上田さんと研究を進めるのが楽しかったのも事実です。このたび、誌面上での研究紹介という貴重な機会をいただきましたので、研究の内容と、研究を進めていく上で感じた雑感について、簡単に紹介させていただきたいと思います。

近年、欧米を中心とする西洋文化では、中心物だけに注意を向ける分析的注意が優勢である一方で、東アジアを中心とする東洋文化では文脈や背景にも目を向ける包括的注意が優勢であることが論じられています。例えば、変化検出課題（2枚の切り替わる絵の中から異なる点を見つける、間違い探しのような課題です）では、アジア系の人々はヨーロッパ系の人々よりも背景の変化に気づきやすいことが知られています。Miyamoto, Nisbett, and Masuda (2006, *Psychological Science*) では、このような視覚的注意の文化差が、私たちを取り巻く視覚的環境から生まれたのではないかと、という仮説を立てました。具体的には、欧米と比較してアジアの風景は様々な遮蔽物（電柱や看板の多さ、道の狭さと言ったら！）があって中心物と背景をはっきりと区別できないために、注意が背景にも散らばりやすいのではないかと、という仮説です。私たちの研究では、眼球運動を計測することに

より、日本の風景を見ている時にはアメリカの風景を見ている時よりも注意が散らばりやすかったこと、また日本の風景を見た後には文化とは関係のない風景を見てもやはり注意が散らばり、背景に目を向けやすかったことを示しました。

この研究の新しい点は、プライミングを用いて、文化差を生み出す具体的な「環境差」とその過程を明らかにしたことです。従来の文化心理学では、文化という大きく、複合的な要因を独立変数としてきました。これに対し、本研究では日本・アメリカの風景を見ている眼球運動と見た後の眼球運動が一致したパターンであることを示し、文化的な風景がどのように注意に影響するのか、一步踏みこんだ検討を行っています。

このように、より具体的な、客観的に測定できる社会的・物理的環境と心の相互影響過程を明らかにしようとする試みを社会生態学的アプローチと呼びます。私がメインとして行っている他の研究も、このような視点に基づくものです。

さて、この論文の第一著者である上田祥行さんの本業は、視覚科学です。ストリクトな認知実験の職人技を持っている彼がいなければ、この研究はアイデアのみで終わっていたことでしょう。その意味では、この研究はひょんな縁が研究の始まりとなることを教えてくれた、大切な研究です。もし機会があれば、積極的に分野外の方々と交流し、できれば共同研究を進めていくことをお勧めしたいと思います。楽しいです。

私は今この原稿を神戸大学の研究室で書いていますが、会報が発行される頃には日本学術振興会海外特別研究員としてヴァージニア大学心理学部にいるはずですが、大好きな関西から離れる寂しさも、見知らぬ土地に行く不安も大きいですが、それと共に、どのような人に、そして研究に出会えるのか、今から楽しみにしています。

文献紹介：Ueda, Y. & Komiyama, A. (2012). Cultural adaptation of visual attention: Calibration of the oculomotor control system in accordance with cultural scenes. *PLoS ONE*, 7(11):e50282.

(こみやあすか・バージニア大学)

## 社会心理学を支えていただいている方々：その7

### (株) ナカニシヤ出版

#### 諸兄諸姉への表敬

宍倉由高

社会心理学の研究に携わっておられる諸兄諸姉にとりましてはごくごく当たり前のことどもを、古ぼけてはおりましようが記します。

私が諸兄諸姉の研究の発表に接するおりに、Ontologyがあるか、Epistemologyを経ているか、Methodologyが十分であるかに意を注いでおります。

もちろんのことすでにご承知ではありません。Ontologyは、その研究が思い描いている世界に「何があるか」という研究像がはっきりしているか否かという問題かと私は思っております。社会心理学の使命としての「社会的な問題の解決に資する」という道を追求するというはその研究が(に)「何を見るか」「何があるか」という問いと等値であると思っております。問題解決のためにはさまざまな体系的な階層構造をなす段取りが踏まれると思いますが、そうしたおりにほのかに見えてくる体系的な理論化や新たな概念の創出、またそうした概念間の関係に整理を与えようとする試みに接すると、これはそく尊敬。

そこではもちろんのことその概念を操作する段階で正しく誤りなく知の操作をしているか、その当該の考え方が正しいかどうかというチェック、これをここでは

Epistemology と呼ばせてください。さまざま前提を置くわけですが前提が正しいかどうか、この辺のチェックができていれば、これはそく尊敬。

そして Methodology。論文のうえでの必要最低限の作法、れいの命題表明にあたっての危険率を勘案したうえでの奥ゆかしさ、これは当たり前として、もうひとつ、「社会的な問題解決に資する」ためのユニークな方法(や論理)に接したら、これはそく尊敬。

これらが混然一体となって、「主効果が認められた」「交互作用があった」という記述に接するとわくわくします。また一方で、因子分析の因子名を命名するとき、説明力が十分なパスが引けたというときは研究者として楽しいのだろうと思っております。

新たな発見がなされればそく次の難題が生じてくるのは承知しております。新たな問題が解決に至ればそく次の危機が生じてくることも承知しております。ですが21世紀の科学には私には、甘いと言われそうですが期待のほうはるかに凌駕しているところがございます。特に医学。特に認知症の研究の進展に期待している自分がいます。こうした近未来の世界で起こりうることを想定したおりに、社会心理学は何を想定してどう取り組むのか、いまから準備し

ておいてもいいのではないかと思います。そうしたおりに、いま申し上げた Ontology、Epistemology、Methodology がものをいつてくるのではないかと感じております。

(ししくらよしたか)

#### 京都社会心理学散歩

山本あかね

ナカニシヤ出版の編集の極意については、編集長の書いているとおりですので、徒然なるままに、会社周辺をご案内します。

会社の窓からは比叡山が見えます。東側ですが、夕暮れ時は茜色に染まり、なかなかの景色です。夏は屋上にあがれば、五山の送り火のほとんどが見えます。鴨川はそれなりに近いですが、鴨川沿いの川端どおりは少し車が多すぎるので、もっと近い琵琶湖疎水へ。琵琶湖疎水は哲学の道に続いています。桜の季節はとてきれいです。やはり人が多すぎます。いちばんいいのは2月。寒すぎて誰もいません。落ち着いて散歩ができることでしょう。

「スピード仕事術」「家事の時間はもっと短くできる！」みたいな見出しが書店に多数並んでいますが、京都には似合いません。売れなくてもいいから、流行に流されない、長く残る定番書を。と言われたことはありませんが(長く残る本が売れていないわけではない)、そういう、京都らしい社会心理学

の本をつくっていききたいです。碁盤の目のように整理された目次。夏は暑く冬は寒い盆地を思わせる試練のような課題。鴨川のように柱となる軸。ということではなくて(というものでいいですが)、「最新」「流行」「これなら学生が買う」にまどわされないような。「学生が買う」は大事ですが(弘前の日比野先生、そうでない企画がボツになるようです!)、「これなら学生が買う」の「これなら」はクセ者だと思います。

2004年に社屋が吉田から一乗寺に移転して以来、少し離れてしまいましたが、自由な学風で名高い京都大学は今でもほど近いです。学問の自由を守るためなら教員だって立て看板をもって演説をする。さすが京都だと思います。

一乗寺から琵琶湖疎水沿いを南下して、大文字山を横目に見つつ、京大を通り過ぎて、平安神宮までいくと、大きな鳥居のあしもとに、京都府立図書館があります。府立図書館は京大の図書館にない本があることもあり、頼りになります。2月14日から3月27日にはいま話題の新島八重の署名入り図書を展示していたりと、さすがの活躍です(同時に「ゴリラもヒトも霊長類」企画もやっていて、これも京都らしいと思いました)。

府立図書館の帰りには、「六盛茶庭」のカフェを食べたいところですが、やっぱり今日も並んでいました。しかたがないので帰ります。いいんです。会社の近くには「一善や」がありますから。「一善や」はおいしいケーキ屋さんで(パスタランチ有)、甘さ控えめのガトーフレーズは格別です。北白川の「miwa」の二層プリン(二層の間にカラメルが入っている)も捨てがたいですが、今日はガトーフレーズで。

山と川と桜と紅葉と寺社仏閣にアカデミズム、そしてスイーツ! いちど京都に住んだら離れられないことでしょう。

京都駅からナカニシヤ出版へは、交通の便がいいとは言いがたいので、なかなか機会がないかもしれませんが、お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りください。一善やでケーキをいただいて、琵琶湖疎水沿いをお散歩しましょう。

追伸:スピードと効率がどうのと書きましたが、一乗寺→京都大学→平安神宮のお散歩には自転車をおすすめします。自転車でも25分くらいかかるので、ご注意ください。

謝辞:「京都社会心理学散歩」の見出しは関西学院大学の三浦麻子先生からいただきました。ありがとうございました! 今号で広報委員最後のお仕事とのこと、お疲れさまでした。今回の記事を書くにあたり、ぶつぶつ言っていた私を励ましていただいた先生方に心より感謝申し上げます。

(やまもとあかね)

#### 会員異動

(2012年12月29日~2013年3月15日)

#### ■新入会員

##### 《正会員》

・一般会員

佐藤恵美(東京富士大学准教授)、渡辺由希(淑徳大学大学院総合福祉研究科科目等履修生)

・大学院生

キャラミ マースメ(筑波大学大学院人間総合科学研究科大学院生)、原久美子(筑波大学大学院ビジネス科学研究科大学院生)

#### ■退会者

楠瀬友季、只木佑弥、久富節子、八重樫海人

#### ■自然退会

相田麻里、浅川希洋志、安藤寿康、井口昌之、和泉鉄平、磯部 梓、板村英典、市橋暢彦、稲垣順子、井上善友、上野真弓、上原美穂、及川 裕、太田裕之、大槻芽美子、大野晶子、小川香織、小川浩一、奥村泰之、長田久雄、小保方大輔、小山田恵美、片山友愛、釜田健介、釜屋健吾、神谷千沙、川村 誠、木島恒一、ジェイソン キスリング、金 幸輝、木村竜也、黒岩正一、小泉径子、小室 匠、齋藤典明、齋藤由夏、酒井直美、佐々木掌子、佐藤綾子、佐藤貴之、佐藤直昭、里内洋介、三部五月、塩川聡子、清水美帆、志村 誠、邵 木子、新堂研一、杉山祐一郎、相馬拓郎、高本雪子、滝口のぞみ、武田美和、武本ティモシー、田中大輔、玉田宗也、田村 亮、多留里香、TIN AUNG MOE、東海春加、徳植雅恵、長崎英美、中島紗由理、中田 栄、中西美樹子、中村 竜、西木場容子、野口桂鳳里、橋本咲也香、蓮田一仁、畠山 寛、花房弘行、馬場大輔、林洋一、久永 諭、久光達也、平井温子、福井 齊、藤下卓也、船木真悟、堀内亜希、前川涼子、松井博史、松田沙耶香、松野良一、真鍋亜希子、間山ことみ、三田村剛志、峯聖二、武藤直美、村瀬洋一、毛利暁子、望

月利樹、森 謙太、森川 愛、森園明日香、山岡 洋、山影有利佐、山口聖司、山口大輔、山中淑子、與久田巖、吉澤昌宏、吉野真央、米田朝香、渡邊えすか、王 怡、金 眞映、金 文喜、李 欣怡、張 潔

#### ■所属変更

玉井航太(北海商科大学講師)、小宮あすか(バージニア大学)、益子行弘(浦和大学)、山中祥子(池坊短期大学環境文化学科准教授)、生野桂子(宮城学院女子大学学芸学部)、佐藤 拓(いわき明星大学助教)、櫻井研司(日本大学経済学部)

#### 『社会心理学研究』掲載予定論文

■第28巻第3号(2013年3月刊行予定)

##### 《原著》

村上 幸史「「幸運」の相対性仮説とその検証」

上原 俊介・中川 知宏・国佐 勇輔・岩淵 絵里・田村 達・森 丈弓「道徳的違反に対する怒り感情:義憤を規定する状況要因の検討」

今在 慶一朗「基礎自治体に対する公正感と地域社会に対する態度の関係、および経済格差による調整効果についての検討」

##### 《資料》

船越 理沙・田崎 勝也・潮村 公弘「平均構造・多母集団同時分析を用いたセルフ・モニタリング(Self-Monitoring)尺度の文化的等価性の検討」

#### 編集後記

2年間、つたない会報の編集におつきあいいただきまして、幹事のボム・ジソンともども、まことにありがとうございました。これから始まる新年度、4月に何かが変わる、何かが始まる、何かが始まる、大きくなり出す、そうなっていくますよう、お祈りしながら任期を終了させていただきます(謙)。

#### メールニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: [jssppost@bunken.co.jp](mailto:jssppost@bunken.co.jp)

掲載料: 1件(1回あたり)1,000円(後日事務局より請求書をお送りします。)